

大妻女大家政 小笠原ゆ里 飯田朝子 ○大竹智恵子

筑波大附坂戸高 伊藤央子

目的：家庭科教育は、児童生徒に家庭生活に関する知識技術を習得させ、望ましい家庭人・社会人としての資質を養い、究極的には家庭生活の充実向上を図る能力や態度を育てる教科であり、時代の進展に対応する指導が要求される。特に、最近の家庭生活の現状は、核家族化、高齢化社会への進行、産業構造・就労形態の変化、高学歴化、青少年の非行化等、多くの問題をかかえている。これらの問題をうけて、家庭科教育においては男女に対する履修の在り方、学習内容、生涯教育との関連などの問題の解決を迫られている。そこで、本研究は、小中高の家庭科教育の中で未開拓分野の多い男子の家庭科教育にどのように取り組むかという基礎資料を作成し、今後の男子の家庭科教育の在り方を理論的に明らかにすることを目的としている。

方法：①質問紙による留置調査、②対象は成人男子(学生及び就労者) 3,210名、有効調査票数 2,020名、有効回収率 63%。③調査期間 昭和58年12月1日～昭和59年1月19日、④集計方法 クロス集計及び結果の一部について χ^2 検定を行った。

結果：家庭への認識、家庭生活に必要な技術について年代別、主要項目別のクロス集計表を示し、各表毎に有意差検定の結果の概要をまとめた。①、家庭の存在価値については、年代にかかわらずその存在価値を認めている。②、家庭の機能は、「家族が楽しく暮らす」を第1位にあげた人が73%であった。③、家族の役割分担については、何らかの形で家庭の仕事を分担していることがわかった。④、生活技術では、特に調理技術の中で簡単な日常食についての技術習得の希望が多かった。